

Of Human Bondage 試論

— I. —

脇 田 勇

I 序 説

Of Human Bondage を書くに至ったサマセット・モームの心境は *The Summing Up* 51章に記されている。

When, having achieved success as a dramatist, I determined to devote the rest of my life to play-writing I reckoned without my host. I was happy, I was prosperous, I was busy, my head was full of plays that I wanted to write; I do not know whether it was that success did not bring me all I had expected or whether it was a natural reaction from success: I was but just firmly established as a popular playwright when I began to be obsessed by the teeming memories of my past life. The loss of my mother and then the break-up of my home, the wretchedness of my first years at school for which my French childhood had so ill-prepared me and which my stammering made so difficult, the delight of those easy, monotonous and exciting days in Heidelberg, when I first entered upon the intellectual life, the irksomeness of my few years at the hospital and the thrill of London; it all came back to me so pressingly, in my sleep, on my walks, when I was rehearsing plays, when I was at a party, it became such a burden to me that I made up my mind that I could only regain my peace by writing it all down in the form of a novel. I knew it would be a long one and I wanted to be undisturbed, so I refused the

contracts managers were anxious to give me and temporarily
retired from the stage.⁽¹⁾

この一書を著すことによって、心理的な catharsis (浄化) を果たしたとモーム自身も語っている。23才のモームは、スペインのセビリアにおもむき、一つの自伝的小説にとりかかった。そしてその著作に *The Artistic Temperament of Stephen Carey* という題をつけ、出版者 Fisher Unwin に送ったが Unwin は100ポンド支払うことを拒んで、発行の運びに至らなかった。しかしそれはモームに結果的には幸いした。それは彼が、より円熟さを加え、より客観的に省察する時間を持つことができたからである。推敲を重ねて、ついに *Of Human Bondage* を完成したのである。はじめ旧約のイザヤ書から取って *Beauty from Ashes* という題名をつけたが、同名の書のあることを知り、Spinoza の *Ethica* のある篇の題を取り *Of Human Bondage* と名づけたのである。Spinoza によると、万物は必然的な法則に支配されていて、この法則にさからって我意を通そうとしても無駄である。その必然的な法則を認識し、それに従って行けば、心の平静が得られる。しかし人間はさまざまな情念のとりこなり、この必然に向って悪あがきをする。この情念を断ち切って必然的法則に従うことによって、はじめて自己の主人公となり得る。モームのこの小説は、主人公がこの情念の絆に次々としばられて傷ついて行くが、結局この絆から脱却して、自由を克ちとって行く物語で、まさに Spinoza の哲学に一致していると言える。

この作品は、出版当時さして世間の注目を惹かなかったが、1919年画家ゴーギャンをモデルにした *The Moon and Sixpence* が洛陽の紙面を高めたことから、非常に注目されることとなり、モームの最高傑作、20世紀英文学の名作の評価を得ている。*Of Human Bondage* は 'artist novel', 'a novel of adolescence', あるいは *bildungsroman* (教養小説) のレッテルがはられてきた。二十世紀の初期の頃、ヨーロッパ文学に、自伝風の小説があらわれ

(1) W. Somerset Maugham: *The Summing Up*, pp. 186-187.

ている。*Wilhelm Meister* や *His English Kinsmen* などの場合、批評家 Susanne Howe は 'novel of apprenticeship' と名づけている。修業小説ともいうべきものであるが、Philip という主人公は芸術家として人生をたどるわけではないので、正確にはモーム自身についての描写とは言えない。また *Sons and Lovers* の Paul Morel, *Sinister Street* の Michael Fane, *A Portrait of the Artist as a Young Man* の Stephen Dedalus などとは違って、Philip は、月並な人生を歩むのである。その意味で、20世紀初頭の自伝小説とこの作は違っていると言える。⁽²⁾

Samuel Butler の *The Way of All Flesh* は1903年に出ているが、この小説が Arnold Bennet の *Clayhanger*, D. H. Lawrence の *Sons and Lovers*, そして *Of Human Bondage* に影響をあたえたことは十分にうかがえる。批評家がしばしば認めるように、Butler の作品とモームの *Of Human Bondage* との間には、著るしい類似点がある。heredity と environment のもつ強い影響力を強張している。又二人の作家とも主人公が意志の力でそれらを克服して行く姿を描こうと試みている。家庭、学校、宗教、階級、因習の拘束に攻撃の矢を向けている。更に金とそれにともなう力に対して、同様に関心を持つ。それらの傾向はフランス自然主義派の影響で、それらの最強の結合点⁽³⁾ はリアリズムである。

Of Human Bondage は *The Way of All Flesh*, *Sinister Street*, *Clayhanger* のような英国自伝小説の一般的な型を踏襲しているとは言え、まったく素朴である点で、それらの作品と異なる。主人公は弁護されず、必要以上に説明もされず描かれている。Philip の欠点を隠すような努力はなされていない。例えば、彼の人普以上の過敏さ、自己憐憫、自己中心主義、頑迷さ、冷淡さ、気どりなどである。Philip を理想化しないようにきめてかかっているように思われる。モームは36才でこの作品を書きはじめた時、少年時代の、青年時代の

(2) R. Lorin Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*, London, Heinemann, 1972, p. 83.

(3) R. Lorin Calder: *op. cit.*, p. 88.

自分の記憶にある自身の姿を考えていたからであろう。勿論事実とフィクションの間に相違のあることはしばしば氣のつくことであるが、作品全体の構成上さしたる問題とはなり得ない。Mrs. Maugham (母) はパリで1882年死んでいるが、Mrs. Carey は1885年ロンドンで死んでいる。この両親の死後 Philip を世話し親権者となる牧師の叔父夫婦は Blackstable (Whitstable) に住んでいる。King's School の所在地 Canterbury は Tercanbury と変っている。ハイデルベルヒにおける Philip の心楽しい一年間の物語は、ほとんど完全な自叙伝といえる。ライン河の流域を見下して、その美しさに打たれ、芸術が人間の魂に与え得るものを、ひしひしと感じたのである。ハイデルベルヒからドイツ国内を経て、イタリーへのはじめての旅行をし、変化に富む旅の喜びを知った。生氣潑刺とした市立劇場で、1890年代の初期革命的芝居にはじめてふれたのである。知的な、血氣溢れる議論好きの仲間たちを持ち、そして彼らを通じて、彼の宗教、真理、論理に対する今までの考えが、試練をうけることになる。大学では Kuno Fischer のショーペンハウエルについての名講義を聴き、はじめてのぞく哲学の世界に異常な魅力を感じる。Kuno Fischer の講義に刺戟されたモームはヘーゲル、ホッブス、カント、スピノザ、プラトンという風に多くの哲学書を愛読するようになる。

1892年モームはドイツから帰ってくるが、職業に関しては心がきまらぬ。叔父の承認を得て、特許会計士となるための短い修業の期間を経験している。彼は Philip よりは、はるかに早く、1882年医学校に入学する。St. Thomas (St. Luke) 病院付属医学校の最初の2年間は、広く読書に耽り、後日作家として立つ日に備えて、小説や戯曲の構想をノートに書き込んで暮した。5年間で医学校の課程を首尾よく終り、23才の若さで医師の資格を与えられたのである。

その他彼の伝記と小説との違いは、随所に発見される。例えば、この作品の中で大きな位置を占める Mildred との恋愛事件のような事実は経験していないし、パリーで絵の修業をしたことなどは全くのフィクションである。しかし、病院での仕事、外来患者部における活躍は、実際の経験をうつした

ものである。彼は医者資格を得てからも、ほとんど20年経つまで結婚しなかった。彼は、無邪気な、教育のない Sally のような娘と結婚したのではなく、有名な医者で社会事業家の娘で再婚の Gwendolen Syrie Barnardo と結婚している。(1915年)

自己の内的生活の発展を作中主人公 Philip のそれに託して叙述し、主人公の人格、人生観が環境の影響や種々の経験を通して形成される道程を、内面的発展を追って述べて行くのである。人間の束縛から精神の解放、自由への解脱を辿るものである。Philip の最後に到達する人生観が、人生に意義なしとするニヒリスティックな達観であり、理想主義を欠き、意気沮喪させるとか、不健全、病的とかいう批評も無いではない。しかし Philip がその悟りに達する道程において、経済的な問題、人間関係の複雑な経験など、さまざまな人間の桎梏を味わい、その都度不安と困惑を感じつつもそれを征服して精神の自由を護得する姿を一連の流れとしてみて行くと、それは決してニヒリスティックな人生観と言えないことが解ってくる。Mildred との関係も一つの human bondage に違いない。それ故彼女から解放される所で終にした方が、作品としてより芸術だと言われているけれど、彼を知的、情的な束縛から開放してくれて、人生に対して、寛大と、勇氣とユーモアをもって直面させる哲学を Philip が探究する姿をテーマとしていることを考えると、この小説のクライマックスであり、近代小説の最も感動的場面である106章の大英博物館内における悟りの描写があって、はじめの human bondage から解脱する Philip の人間像が浮き彫りにされてくるのではあるまいか。そして読者も Philip の歓喜を肯定せざるを得なくなる。

Of Human Bondage 出版当時の *The Times* の文芸付録の書評はかんばしいものではなかった。もし作家、批評家としてインテリ層に権威を持っていた Theodore Dreiser が *New Republic* 誌上で説得力のある賛美の言葉をのせなかったら、傑作として受入れられるまでに相当の時間を要したのであろうと想像される。モーム自身友人の Garson Kanin に向って、彼が大の恩人であることを述懐している。

“Quite! Theodore Dreiser who helped my book (*Of Human Bondage*) enormously. He wrote about it and...talked about it endlessly, with great enthusiasm. He was, I'm told, in a strong... position at the time and his words had weight. I've always thought it sad that I never could bring myself to finish a single one of his works. It makes me...seem an ingrate, but I've always felt greatly...indebted to him.”⁽⁴⁾

この作品を他のモームの小説との対比において考えてみる時、二つの特徴をあげることができる。一つは、Hemingwayの文体に見られるように、修飾語句を極度におさえて、事実を述べるという手法で、いささか単調の感すら与えられる。しかし簡潔と明確さを文章作法上の信条としたモームの一面があらわれていて、徒らに誇張して形容詞を重ねていく文章よりは感動を持たされる点は疑うことができない。もう一つはストーリー・テラーに徹するサービス精神が、この作品には見られないことがある。面白い話を聞きたがるのは、財産を持ちたがると同様に、人間の最も根強い本能の一つであると考えていたのであるが、*Of Human Bondage*の場合は、それがなくて、ひたすら誠実に自己描写を心がけたといえる。*Of Human Bondage*はモーム作品の頂点とされているが、モーム自身の内面的追究も、この時期が頂点であったと言ってまちがいなからう。

Ⅱ 構 成

この小説の最初の21章は少年時代の回顧で、少年の澄んだ眼で見た人物の叙述は鮮明である。前章の終りでふれた如く、文章は形容詞をほとんど使わず、簡素明晰で、印象深い文体である。彼の範としたJonathan Swiftあたりの文章を実現したものと言える。1885年1月の夜明、幼いPhilip Careyは母親の臨終の床に連れて行かれ、それから一週間後にBlackstableで牧

(4) Garson Kanin: *Remembering Mr. Maugham*, New York, Atheneum, 1966, p. 170.

師をしている、頑迷固陋で、利己主義で、鈍感な叔父にひきとられる。生前 Philip の母親とは折り合いが悪かった。Philip の父は大きな病院を経営していたが、六カ月前敗血症で死亡、Philip に2,000ポンドそこそこの金しか残していない。叔父の妻 Louisa は、叔父のつれなさとは反対に、Philip に愛情を持ち、Philip も親しさを覚えて行く。9才で Philip は Tercanbury の King's School に入学するが club-foot (モームの吃音の置換) という障害のため、劣等感にさいなまれ、自意識の強い内向性の少年に育って行く。ある日、彼は「信仰は山をも動かす」という言葉を知り、神に祈ることによって自分の不具を直そうとするが、彼の熱心な祈りにも拘らず、不具の足の少しもよくならないのを見て、信仰心を棄ててしまう。叔父は聖職者の常識的観念からは程遠く、自分の安楽しか考えないエゴイストで、自分の面子を常に考える俗物である。King's School の新校長 Tom Perkins は情熱的で、Philip はこの校長の感化で将来教授になろうと決心をするが、在学6年間に、学校をにくみ、自由を求める気持が強くなり、聖職につくべくオクスフォードに進学することを断念する気持を校長に伝える。当然牧師の叔父の反対をうけるが、Philip はこの学校を退学、ハイデルベルヒに行き、高校教師宅に下宿、自由な新生活がはじまる。

ハイデルベルヒで彼にフランス語の家庭教師となったフランス人は、かつてイタリアで Garibaldi とともに自由のため戦った闘士であったが、今は落魄した老人になっている。数学は Wharton というイギリス人から学ぶことになった。彼はケンブリッジの出身であるが、ひどい貧乏暮しで、ドイツの大学生活を称揚し、因習にとらわれている英国人をけなすのであった。Philip は、数学より、いろいろと人生について多くのことを学ぶのである。また Erlin 先生からドイツ語のレッスンをうけているが、時あたかもゲーテが絶頂に達した頃で、Erlin 先生もゲーテを激賞する。同じ下宿に Hayward というケンブリッジ出身の男がやって来て、Philip は彼から文学論を聞かされて感化をうける。同じ下宿人の Weeks はアメリカ人で神学の勉強をしているが、Hayward に批判的で Philip を怒らせる。Hayward と Weeks の

議論を聞いているうちに心の中に大きな変化が起る。Philip には、宗教が討論の対象になど得るなどは夢想だにしなかったことであつた。なぜ人間は神を信じなければならぬのかと反問するようになる。冬が来て劇場では Ibsen や Sudermann が上演されていて、初めて芝居に接する Philip は感激する。Philip は大学で Kuno Fischer のショーペンハウエルについての名講義を聴き、はじめて哲学の世界への魅力を感じる。そのうち叔母のすすめもあって帰国して将来の方針を決めることにする。

32章において叔父夫婦との再会が語られる。ここで最初の Philip の女性となる Miss Wilkinson に紹介される。年は30才を越していて、はじめ年少の Philip は好きになれないが、いつしか好感を持つようになる。色々 Philip の好奇心をそそるような話をする。Philip は接吻のチャンスをうかがっているが、その時が来て、彼は得意になる。この恋を美化して Hayward へ長い手紙などを書くのであるが、Hayward から初恋を祝して *Romeo and Juliet* を読んでもらいたいという手紙が届き、現実が余りにも理想と違うことに胸の痛みを感じる。やがて Philip はロンドンに行き、Messrs Herbert Carter & Co. という計理事務所につとめることになる。その仕事の全く自分に不向なのを知って一年後辞職する。彼は絵を習いにパリに行きたいと叔父に申し出るが叔父は反対する。しかし叔母は結婚の時の持参金の残り100ポンドを彼に与え、パリ行が実現する。40章から51章までは、2年間にわたる Philip のパリ生活が語られて行く。安料理店の Gravier 亭でさまざまな芸術家と知りあい、人生についての認識を深める。この仲間ですべて重要な人物で後に Philip に人生の意義を悟らせる伏線的な人物の詩人 Cronshaw、画家 Lawson が現われる。Philip が人生の意味をただすとクリュニ博物館にいてペルシャ絨毯を眺め、自分でその意味を発見せよと謎めいたことを口走る。ドイツ時代の Hayward がやってくるが、以前ほどの感銘は与えられない。Fanny Price というイギリス娘が登場する。熱心であるが、全然画才がない。Philip に好意を寄せていたが、先生から絵を続けても無駄だから、家政婦かドレスメイカーにでもなった方がよいと言われ、一文無しになって

縊死して果てる。Philip の絵のモデルになったスペイン人で作家志望の Miguel Ajuria がいるが、彼の書いたものの陳腐さに驚き、Price のことも考えあわせ、才能のない芸術家の空しさをいやというほど知らされる。

Philip 自身絵画に対する自信を喪失、絵の先生の Foinet に会って修業を続ける価値の有無をたずねる。Foinet は、手の器用さはあるが、才能はない、勤勉とあたまだけでは結局凡庸の画家にしかねれないと言われる。そうこうするうちに、伯母の急死を知らせる手紙を受取り、Blackstable に戻り、パリ生活は終りを告げる。画家志望を断念した Philip と叔父との間に、将来の職業について議論が戦わされるが、叔父も、お前のお父さんの職業の医者になるのが最も適当であると言うし、Philip 自身もそう思うようになる。それから二、三カ月のひまに、Hobbes, Spinoza, Hume などを読み、個人と社会の問題を考える。しかし人生の意義についての疑問は未解決のままである。Cronshaw の言ったペルシャ絨毯の謎を考えてみるが分らない。

Philip は1,600ポンドの金と不具の身をひっさげて、三度目の人生の門出にとロンドンに向け出発する。

54章から Philip の医学生としてのロンドン生活が語られて行く。彼は Dunsford という同級生と親しくなり、この友人が好意をもっている女のいる喫茶店につれて行かれる。見るからに貧血症で、肉体的にも魅力がなく、教養もない、そのくせ高慢な態度の女 Mildred と出会う。しかしいつしか Philip はこの女性 Mildred に恋している自分を発見する。しかし Mildred の方は Miller というドイツ人と親しくし、いっこう Philip に関心を示さない。Philip の焦燥感はその一方である。Mildred の上品ぶった浅薄さを意識しながらも、彼女に惹かれて行く自分をいかんともしがたい。このようにして、この小説の大きなテーマと言える human bondage の関係が Philip と Mildred との間に展開されて行く。彼は彼女に恋い焦れ、そのくせ彼女を軽蔑している。そういう自分を Philip は自嘲している。結局彼女に結婚の申込みをし、無理算段して贈物をし、その意を迎えようとするが、承諾しない。そのうち Miller と結婚することを知らされ、体から力がぬけ

て行くのを感じるが、思いなおして20ポンドの大金を払い贈物をする。このあと Philip は Hayward と Lawson に出逢い、その後のパリの話を聞き、Cronshaw の肺病が重態となり、半年ももつまいということ、Cronshaw から Philip に託されたペルシャ絨毯のことを知らされる。また Lawson を通じて第3の女性 Mrs. Norah Nesbit と関係を持つにいたる。この女性は夫と別居し、三文小説を書いて自活している陽気で楽天的な性質のいい女性で、母性的な愛情で Philip を愛したが、Mildred が再び姿を現わしたために、Philip に捨てられる。Mildred はある日突然彼の下宿をたずね、Miller には妻も子もあり、その Miller に捨てられ、出産をあと三月後にひかえ身重になっていると告げる。Philip は卒業まで学資が続くかどうか心細い状態のくせに、彼女に金を与え、お産の宿の心配までしてやる。彼女は女の子を分娩する。彼女がロンドンに帰ってから、学友の Griffiths とともに夕食に招待する。Mildred は Griffiths を恋してしまって自分ではどうすることもできない気持だという。三日後に迫ったパリ行の話をしているうちに Griffiths と逢引きしたことが分る。Philip は彼女の困った時ずいぶん犠牲を払ったことをズケズケ言うが、彼女の方も彼を好きになったことは一度もないなどという言葉まで飛出し、結局けんか別れとなってしまう。所が翌日下宿に Mildred が訪ねてくる。土曜のパリ行きについて行ってもよいと言う。結局 Philip は彼女が Griffiths に対する激しい恋に身もだえしているのを見て、金を出してやるから二人で週末どこかへ行ってくるがいいとすすめる。彼の Griffiths を憎む気持はあっても、Mildred に対しては、心を引き裂く欲望しか感じない。Griffiths の手紙で彼女がオクスフォードからロンドンにもどっていることを知り、彼女を訪ねるが、荷物一切を運びだして、姿を消している。その自分のみじめさから逃れるために、急に思い立って Blackstable の叔父の家へ帰る。性本能という抑え難い欲情のことを考えたりする。Mildred から逃れるために下宿を移し、Norah と過した時のことや、彼女に対するひどい仕打ちを考えて、思い切って彼女を訪問してみる。Philip は Norah から雑誌編集者の Mr. Kingsford を紹介され、婚

約したことを告げられる。Philip は彼女の幸福を祈って彼女のもとを辞するが、自分が神々の慰み物になったことを反省し、自分の愚かさを自嘲する。パリに行った Lawson から Cronshaw がロンドンに帰ったことを知り、早速訪ねてみると痩せ細った Cronshaw がアブサンを飲んで病床に呻吟している。見かねて早速自分の下宿に引取る。ある日病院から帰ると、Cronshaw はベッドで死亡しており、その死体を見て、人生の無意味さをいやというほど知らされる。Philip は隣室に横たわる Cronshaw の死体と不気味な沈黙に圧迫され、書物を読もうとしたが読めない。翌日批評家の Upjohn とささやかな葬儀をすませる。それから数週間後 Upjohn の Cronshaw の詩や生涯を扱った評論が発表され、かなりの評判となる。ここでも Philip はいい知れぬ虚脱感にさいなまれる。

春になって、Philip は外科助手から、入院患者の担当となる。その患者の一人で Thorpe Athelny という48才の男と親しくなる。職業はジャーナリストというが、新聞に広告文を書くのが仕事らしい。11年もスペインにいたといい、原語で読む *Don Quixote* や Calderon のすばらしさを語る彼の言葉に魅せられる⁽⁵⁾。彼との親しさが急速に増して行く。退院後、彼の家に招待される。そして El Greco の絵の写真を見せられる。今はじめて見るその画から感銘をうけ、これこそ魂の画家だと思ふ。Athelny はスペインの神秘的な作家のことを話をしてくれたが、それらは El Greco の絵と通ずるものがあるようだ。今見る El Greco には彼が求めてきたリアリズムよりももっとよいものがあるような気がしてくる。事実がより鮮明な光を当てられて変容している、そういったリアリズムである⁽⁵⁾。Philip は人生の意義に対する解答のようなものが暗示されているように感ずる。

Philip が Athelny 一家と知合って6週間ほど経ったある日曜の夜、Piccadilly Circus で Mildred の姿を見つけてハッとす。そのあとをつけてみると、通行人に秋波を送る売笑婦になっていることがわかる。彼は愕然

(5) スペイン芸術については *Don Fernando* に詳細に述べられている。拙稿「ドン・フェルナンドの教えるもの」(人文研究第26輯所載)参照。

とする。はじめは嘘をついていたが、やがて泣きながら窮状を話す。養育費を払えないので赤ん坊と同居していること、ほんとうは外出も出来ぬ位健康をそこねていることを語る。彼は彼女と子供を自分の下宿に引とる。もはや Mildred に愛情は感じていないのだが、世帯持ちのような奇妙な同居生活が始まる。株取り引き人の Macalister の肝いりでもうけた30ポンドの金で、Philip は Mildred をつれてブライトンにゆくが、はじめ感謝していた彼女は、馴れるにつれて、例の横暴ぶりを発揮し、まともな職を探そうともしない。2月のある晩 Philip は Lawson の誕生日のパーティから帰ってくる。彼女は Philip に露骨に迫る。Philip は「君は大嫌いだ」と言うと、彼女も態度を変え、悪罵の限りを投げつけ、ついに「ちんば」という最後の言葉をはき出すように言う。翌日、仕事を終えて下宿に帰ってみると、部屋中うちこわされたものの残骸である。彼は絶望感におそわれる。

当時ボア戦争が進行中で、Macalister にすすめられ株を買うが、これが完全な見込み違いとなり、手元に7ポンドしか残らぬみじめな姿になる。彼は職を求めてロンドンを彷徨し、最後に Athelny の家に身を寄せることになる。ある日通りで、Lawson からボア戦争に出征した Hayward が、腸チブスで戦没したことを知らされ、驚くとともに、人生無常の感に堪えず、British Museum に入って、人気をさげ、古代ギリシャの墓碑を見て思いに耽る。将来大成するだろうとの期待も空しく、無為の生を続けて遂に死んでしまった Hayward、また Cronshaw の同じく空しい一生を思って、人生とは何ぞやと考え込む。すると突然 Cronshaw がペルシャ絨毯に秘めた謎が解けてくる。ペルシャ絨毯を織る職人の意図が、その審美眼を満足させることにあるとすれば、それと同様に、意味のない人生は、各人が好む絵模様で織りなして行けばよい。Philip は幸福になりたいという欲求を捨てること、これで最後の妄想を捨てることになると思った。彼は楽しくなってきた。何かの理想とか欲望にとりこになっている状態、それが human bondage である。人間の真の幸福、安らぎはその絆から解放された時にはじめて生れる。The Summing Up はこの作品から23年後、モーム64才の時の作品であるが、同じ人生論が

開陳されていることを考えてみると、この Philip の到達した境地が修正されないまままで持ち続けられて行ったことが推測される。

叔父の病気の通知をうけて Blackstable に戻ってみると、牧師でありながら、叔父は死を恐れ、生に執着する浅ましい姿になっている。ロンドンに帰っても、叔父の死を知らせる電報の夢ばかりみている。Mrs. Athelny の次から次へと子供を産み、絶えず生活の苦勞に疲れ果てている姿を見て、何百万人の人間が同じように苦勞の連続にあえぎ一生を空しく送っていることに憤すら覚える。しかし人生無意味に徹すれば怖くはないと思うと一種不思議な自信が湧いてくるのを感じずようになる。ある晩 Mildred からの手紙をうけとる。非常に固まっているので是非会って欲しいという。あの女の顔など見るのも嫌だと思うが、捨ててもおけず、彼女を訪ねる。彼は、子供を失った Mildred が性病におかされ、死の恐怖におののき、一人ぼっちにしないでくれと懇願するあわれな姿に遭遇する。彼の処方した薬が効を奏し、彼女は元気になる。健康を取戻した彼女は再びけばけばしい化粧をして媚を売りはじめる。彼はお前のしていることは犯罪だとたしなめるが、男なんてどうなろうと私の知ったことかと悪態をついて去ってしまう。これが最後で、その後彼女の姿を見ることがなかった。

病気の叔父はついに昇天、株で 500 ポンド、それに預金、家具類とかなりの遺産を手に入れる。2年ぶりに Philip は医学校に復学する。Athelny 一家は彼の運が好転したことを喜ぶ。Athelny から毎年一家揃って出かける Kent 州のホップ畑へ来ないかと誘いをうける。彼はある病院から共同経営の話を持ちこまれるが、自分にはスペイン、東洋その他未知の国を旅し、人生について新しいものをつかみたいという夢があるからと辞退する。Philip は Athelny 夫人の故郷 Ferne にやってくる。Philip は子供たちの人気者になる。彼はこの自然の中で、その背景にふさわしい服装の姉娘 Sally に新しい美しさを発見したり、彼女の幼い弟たちと水浴びをしたりなどして、牧歌的世界を楽しむのであった。ある晩、買物に出かけた二人は別れぎわに接吻するが、Philip は彼女の心臓のときめきを感じ、ついに二人は結ばれる。

翌日自責の念を感じつつ彼女に会うと、彼女の様子には少しも変わった所がない。彼女は、Philip が貧困で彼女の家に転がりこんできた時に、彼に好意を持ちはじめたことを明かす。子供ができたらしいと聞かされて、結婚の意志をかためる。スペインも南海の島々も、今は何だ。考えてみると自分は書物や他人の言葉から吹きこまれた理想ばかり追究していて、自分の意欲に従って行動しなかった。いわば未来のみを夢みて、肝心の現在はいつも指の間からこぼれ落ちていたのだ。無数の、無意味な人生の事実から、複雑な美しい意匠を織り上げようという自分の願いも、人間が生れ、働き、結婚し、子供を持ち、死ぬという最も単純な凶案も完全なものではないかと考える。彼はついに Sally に結婚の申し込みをする。

Of Human Bondage は、高く理想の世界を望みながら、愚かな誤りを続け、苦しみぬいたあげくに、どん底からはい上る人間の物語である。モーム作品の特徴は、読んで面白いということであるが、この小説はとことんまでシリアスな話しの連続である。人間をがんじがらみに取巻く絆が、いかに断ち切り雑いかをとことんリアルなタッチで述べて行く。例えば、読者は Philip と Mildred との関係において、この絆の強さを示される。彼の体験した解放の最も大きなものは、次の三つである⁽⁶⁾。一は信仰からの解放、二は芸術からの解放、三は恋愛からの解放である。かく成長して行く主人公の心は、やはり一般の場合と等しく、次のような段階をたどって行くことがわかる。一は親や教師から押しつけられた権威的な宗教や道徳に反抗して、目ざめた自由を主張する時代、二は理想と情熱が現実と衝突する時代、三は現実との調和に入っていく時代である。

後藤武士氏は *ordeal*⁽⁷⁾ という表現でこの問の関係を分析している。まず叔父との対決という *ordeal* をあげる。それは叔父によって代表されるキリスト教の信仰、ひいては既成道徳との対決ということである。自分の足の不具を神に祈りなおしてもらおうとするが叶えられず、それによって信仰がうす

(6) 池田義一郎：「人間の絆」(モーム研究、サマセット・モーム全集31、新潮社)。

(7) 英潮社ペンギン・ブックス *Of Human Bondage* 解説。

らいで行く。英国国教会が絶対でないことをドイツ生活においてさとり、次第に信仰から離れて行くのである。

次には女性の ordeal である。主人公がはじめて性の経験を持った Miss Wilkinson から、Miss Price, Mildred, Mrs. Nesbit を経て、結婚の相手として選ぶ Miss Sally に至る女性遍歴である。Miss Wilkinson は派手な女性であるが、20才も年上で、根は古い型の女性であり、Mildred は文字通りの娼婦で、Philip はこの女の魔力にふり回される。Mrs. Nesbit は若いが母性型である。最後の Sally は、ホップ畑を背景という牧歌的な雰囲気の中であって、Philip の求婚をうける、健康な、素朴な女性である。類型を異にする女性が次々と登場するが、圧巻は Mildred との交渉を扱った部分で55章から終りの章近くまで、主人公にまつわりついて離れない。主人公は、特に肉体的にひかれるわけでもなく、又傲慢で、その性格に何一つ取得のない卑しい女と十分知りながら、不思議な力にひかれ、どろ沼の関係から脱却できない。この Mildred の描写に、恐ろしい程リアルな迫力を感じさせられる。結局主人公は理性の力でこの ordeal を克服する。

次は生活の問題即ち金の ordeal である。主人公は親の遺産で何とか学資をまかなっているが、Mildred との関係を持つにいたり浪費の已むなきに至り、株式投資などし、無一文の貧乏暮らしにおちいる。伯父が死亡すれば、遺産が入ってくることからその死を待望するような心境にまでおちいる。「金というものは、第六感のようなもので、これがなければ、他の五感の楽しみを十分に尽すことができぬものであることを、すでにわたしは発見していた⁽⁸⁾」という言葉は、モーム自身の体験から生れたものであることが容易に想像される。

筆者は稿をあらためて、モームが *The Summing Up* の終りの三章において述べている三つの価値—Truth, Beauty and Goodness—を中心に Robert Lorin Calder の近作にあらわされている見解をさぐりながら、この作品の分析を試みて行くことにする。

(8) *The Summing Up*, Chap. 32, p. 112.

References to Maugham's works are to the Heinemann editions,

Of Human Bondage, London, Heinemann, 1966.

The Summing Up, London, Heinemann, 1964.

Other References

Robert Lorin Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*,
London, Heinemann, 1972.

Garson Kanin: *Remembering Mr. Maugham*, New York, Atheneum, 1966.

池田義一郎：「人間の絆」(モーム研究, サマセット・モーム全集31, 新潮社)

Of Human Bondage 解説, ペンギン・ブックス, 英潮社.

脇田 勇：「ドン・フェルナンドの教えるもの」, 人文研究第26輯, 1966